

月刊

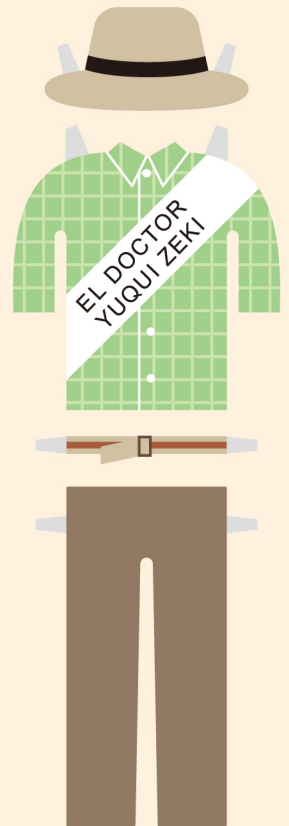
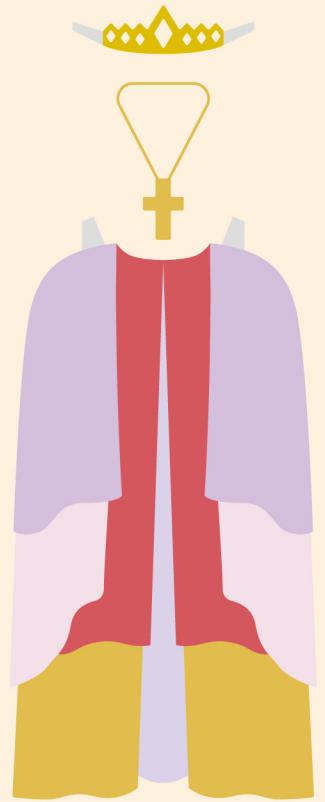
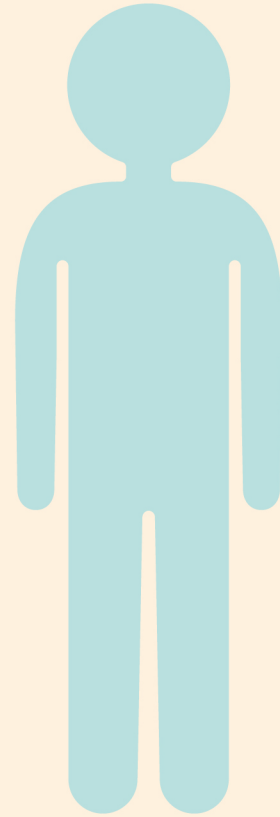
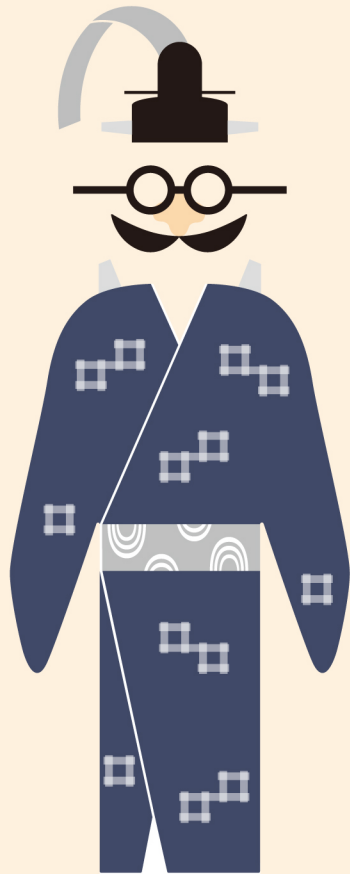
2017

7
月号

みんぱく

特集

異国をまとう



異国装考 丹羽典生

アフリカにおける「白い人」 佐々木重洋

黒い聖母は誰のものか 新免光比呂

「琉球人」を演じる人びと 笹原亮二

日本人考古学者に仮装 関雄二

「カーネーション」 中央アジアで観る

昨年、国際交流基金による中央アジア文化交流ミッションでウズベキスタンを訪問した。街並みは、日本とは全く異なる。広告や電柱が見当たらず、街全体が公園のように緑に恵まれ、道幅は広く、ゴミも落ちていない。車や人が少ないからか、整然としていて逆に活気がないほど。これからの変化が楽しみな国である。

首都タシケントには、ナヴォイ劇場がある。この劇場は第二次世界大戦後、日本人抑留者約五〇〇人の手により建築された。彼らは日本に早く帰れるものと信じ一生懸命に働いた。一九六六年、ウズベキスタンで大地震が起こり、タシケント市も壊滅状態になったが、ナヴォイ劇場だけが整然とそびえ立ち、人々の避難場所となった。親日家であるウズベク人は、そのときの感謝を忘れていない。

私が約五年舞台衣装を手掛け、二〇一六年にニューヨークのブロードウェイでも公演をした和太鼓パフォーマンスグループのDRUM TAO。世界観客動員数七〇〇万人を誇る彼らもこのナヴォイ劇場で公演を行った。世界が求める日本の伝統技術の未来に向けた挑戦を衣装と共に魅せた。ウズベキスタンを訪問中、私の母がヒロインのモデルとなったNHKの朝の連続テレビ小説「カー

コシノジュンコ

プロフィール
大阪府生まれ。デザイナー。史上最年少で装苑賞受賞。パリコレ、メトロポリタン美術館など世界各地でファッションショーをおこなう。オペラ、ブロードウェイミュージカル(太平洋序曲)(トニー賞ノミネート)、スポーツユニフォーム、インテリア、花火のデザイナー等も手掛ける。毎週日曜日17時よりTBSラジオで「コシノジュンコMUSIC」を放送。

ネーション」が放映されていた。私も現地で観たが、初めて外国で吹き替え版を観た。日本人の私からすると違和感があり、日本の情緒や空気が感じられなかった。ウズベク語に置き換えると、映像が日本のドラマでも、アジアのどこの国のドラマか分からない。私たちは例えばイタリア映画を観ても、イタリア語のユーモラスなニュアンスに魅せられ、イタリア映画が好きになる。日本の文化を発信すると共に日本語も併せて発信することは重要だと思った。

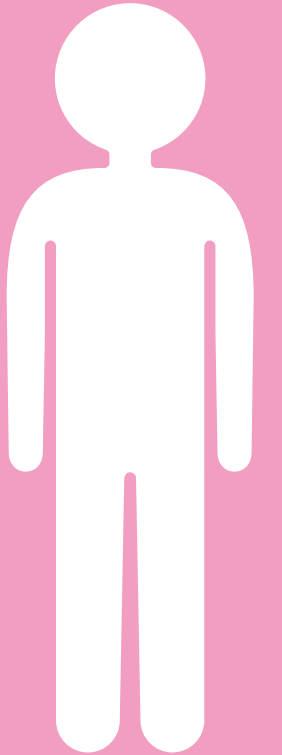
今年トルクメニスタンを訪問した。一九九一年にソ連より独立し、長い鎖国状態が続いていたが、今年で日本との外交樹立三十五周年を迎える中央アジアの一国として今後重要な国である。シルクロードのロマンに溢れる地域で、日本に対する好感度が高く、日本語の普及にも熱心だ。その一方で、私たちにはあまり馴染みのない国で、日本ではほとんど知られていない。街全体が白一色で、ベルディムハメドフ大統領のもと、たった二〇年程で徹底した美しい国づくりをした。こちらでも二〇二三年に大統領の一声で「カーネーション」が放送され、より一層日本に対する関心が高まった。今後、トルクメニスタン独自の文化を残しながら、日本文化と互いに刺激し合えば素敵だ。

月刊 みんな

7月号目次

- | | | | |
|----|--|----|---------------------------------|
| 1 | エッセイ 千字文
中央アジアで観る「カーネーション」
コシノジュンコ | 12 | みんなく Information |
| 2 | 特集 異国をまとう
異国装考
丹羽 典生 | 14 | 想像界の生物相
人面有翼の天馬ブラーク
小林 一枝 |
| 4 | アフリカにおける「白い人」
佐々木 重洋 | 16 | 新世紀ミュージアム
雲仙岳災害記念館
日高 真吾 |
| 5 | 黒い聖母は誰のものか——ヨーロッパ・キリスト教の裏表
新免 光比呂 | 18 | 手芸考
針仕事を引き継ぐ
笠井 みぎわ |
| 7 | 「琉球人」を演じる人びと
笹原 亮二 | 20 | ながなんちゃ
へぼい虫? クロスズメバチ
坂本 昇 |
| 8 | 日本人考古学者に仮装
関 雄二 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
コミケサークルにおける参与観察
阮 立 | | |

異国をまとう



世界各地の儀礼や芸能のなかには、異邦人を装う人物がしばしば登場したりする。観客に笑いやエキゾチシズム(異国への憧憬)の感情をもたらす一方で、近年では差別として批判されることもある。本特集では、「異国をまとう」ことの現在と将来について考えていきたい。

異国装考



丹羽 典生 にわのりお
民博 超域フィールド科学研究部

いわゆる仮装、ことに異国の人びとの格好をするという行為に関心を引かれた背景には、筆者が近年調査している日本の大学応援団文化がある。関係する資料を探索している折に、古くから続く学生文化

じつは今でも、旧制中学まで起源がさかのぼれるような歴史をもつ一部の学校に残されていたりすることもある。



掲載写真はすべて学園祭における「土人」踊りのひとこま
(関西大学年史編集室所蔵)



の在り方に目を引かれた。そのひとつが、仮装である。いろいろな資料から、お花見などの日本のお祭りの折々はもとより学園祭や寮祭などの学生が主催するイベントにおいても、仮装が非常に盛んであった節がうかがえる。東京大学駒場祭における水泳部の河童踊りなどは、そうした過去の名残だろうか。そして多種多様な仮装のなかには、歴史的人物や想像上の生き物などにまじって異国の人びとに関する他者表象が多分に含まれているのだ。

異なるものへの関心

例えば、「土人」踊り。土人には野蛮人という差別的な含意があるため、今日留保なしで使うことには一定の批判を招くであろう。ところがまさにその土人の格好をまねるイベントが過去には存在してい

差別表象への転換と日本特殊論を超えて

しかしこうした異文化表象は、ある時代から評判がよくないのも事実である。先の大学の例では、学生運動の時代に転換点があると聞いている。このあたりから学生の雰囲気が変わると様変わりして、「土人」踊りの伝統も途絶えているという。復活させようかという話が出なくもないが、別の名称を提案することから始めなければならず、道りは遠いようだ。

近年まで続いている例でも、同様な困難に直面している。そもそも教育の現場でこうした催しが必要とされるかどうかも議論の対象となるし、伝統の名のもとにさしあたり継続されていても、「土人踊り」という名称は変更され、女子学生も参加できるような内容とされていたりする。

ところでこうした異文化や他者表象を含んだ催しとそれらの時代的な変化は、少し海外にまで視野を広げてみると、日本に特殊なものではないことがわかる。最近の例では、昨年末、アメリカの大リーグでも新人いじりの儀式(ルーキーヘイジング)が禁止された。この通過儀礼の一種では、新人野球選手に女装や奇矯な格好をさせることになっていたが、やはり差別の問題などで時代にそぐわなくなってきた。

さらに時代をさかのぼればアメリカンフットボールのマスコットなどでアメリカ先住民の戯画化された形象が使用されていたことや、黒人イメージが娯楽のなかで転用される minstrel show など、こうした例の先鞭となるうか。思うに異文

たのである。おそらく旧制高校などの祭りにおいて集客力ある催しとして構想されたのが起源のひとつであると思われる。

ここでイメージされている「土人」が、世界の地理上のどこかに存在している具体的な地域の人びとの姿なのか、あくまで想像上の形象なのかは判然としない。一方で「土人」の姿かたちには共通点が多くみられる。顔を含めて全身墨で黒く塗りたくり、藁で作られた腰巻を纏う。武器として槍や盾を掲げて練り歩いたり、踊りを披露したりするのがよく見受けられるパターンである。

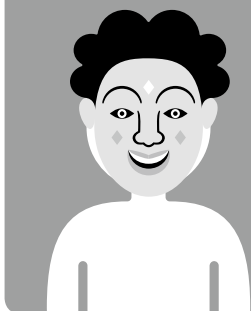
ある大学予科の学園祭の例では、近所の子どもを含めてお客さんに喜ばれること、墨や藁などお金がかからず準備できることなどから催しのひとつとして好まれていたらしいことがわかっていく。そして



化を装う行為が世界各地にみられるのは、他なる者に対する憧憬と侮蔑というオリエンタリズムとよばれる異文化表象の根源にふれているからではないだろうか。本特集を通じて、そうした怪しげな魅力を放つ異文化を装う儀礼のあれこれについて、みていきたい。

「白い人」

佐々木 重洋 ささき しげひろ
名古屋大学大学院教授



ノートとペンを手に調査する「白人」

ナイジェリアのイボ人の仮面儀礼に登場するオニエオチャ、文字どおり「白人」をご存じだろうか。一九八二年に撮影されたこのオニエオチャは、ノートとペンを手にしており、あたりを歩き回ってはノートに何かを記入するしぐさをするという。その姿を見ると一目瞭然だが、これは旧宗主国であった英国の植民地行政官か、彼に同行する研究者のパロディーである。わたしも、イボ・ランドからほど近い旧英領カメルーンやナイジェリア南東部で、「ジヨタ」というピジン英語（現地化された英語）をよく耳にした。ジヨタとはメモ書きのジヨッター、さらにはメモとり (shote) のことである。一九九三年の滞在初期、まだわたしの個人名が現地で浸透していなかったころ、わたしは「白人」のほか、ときにジヨタとか、ミスター・ビック(B-C社のポールペンに由来し、ペン一般を指す) などと呼ばれることもあった。理由を尋ねると、「白人はペンをもつものだから」ということだった。確かに、わたしもまたフィールドノートとペンを持ち、人びとに話を聞いているジヨタを繰り返している。なるほど、イボのオニエオチャではないが、「白人」そのものである(サファリヘルメットは被らないが)。それにしても、一九九〇年ごろ、「白人」のステレオタイプのひとつとしてノートとペン、そしてフィールドワーク(?) が連想されていたという点は、

白色は、彼らからみればもつとも異質で、自分たちとは対照的な、場合によっては非人間的とすらいえる対象に付随する属性といえる。実際、例えばエジャガム人にとって「白人」とは西欧人のことだけではなく、日本人、インド人、中東や北アフリカの人もみな「白人」である。そこで共通しているのは、それがいずれも「黒アフリカ人ではない」ということのみである。自分たちとは異質の連中、それが「白人」なのだ。そして、異質で非人間的なものは、計り知れない力や異界とも結びつけられやすい。白は、アフリカの多くの人びとにとって異界、非日常性、非人間、あるいは超人的力にかかわる色なのである。

「白人」とジヨタの関係は、こうした文脈でも説明できる。おそらく、圧倒的な優越者として当時のアフリカの人たちの前にあらわれた「白人」は植民地行政官とその仲間たちだったが、同時に、(植民地政府や本国へ報告するために) ジヨタ



【写真2】 エクバ結社が、頭飾り状の「葉」であるンジョム・エクバとともに、村落における多産と豊饒を祈願して練り歩く。ンジョム・エクバには「白人」の女性像が記(まつ)られている(エジャガム)

を繰り返す彼らの姿は、じつに奇異で不可解なものに映ったことだろう。そしてこのジヨタが、異質な「白人」の異質な行動の典型のひとつと解釈され、やがてパロディー化されていったのではないか。もちろん、今やペンもノートも「白人」の占有物ではない。しかし、アフリカでフィールドワークをおこなっているのは、やはり今も「白人」が圧倒的に多いのだ。

この地域の人びとの歴史的経験と照らし合わせてみても興味深い。

美しさと力、多産性

アフリカの多くの地域で、「白いこと」や「色が」明るいこと」は好ましいとされる。肌の色が明るい女性は、男性に人気がある。わたしの友人の女性たちも、肌を少しでも白くするのだといって、クリームや何やら怪しげな液体をよく皮膚にすり込んでいた。わたしが滞在していたのはカメルーン側のエジャガム人の集落であったが、ナイジェリアから来るエジャガムやイボの女性もそれは同様だった。エジャガムを含めて、エフィク、イビビオ、イボなどのギニア湾沿い——ナイジェリアから西カメルーンにかけて——の諸民族のあいだでは、黒白、美醜などの対照的な一対の仮面を用いた踊りが伝承されている。興味深いのは、その白く美しい方の仮面の造形と彩色だ。いずれも、白っぽい肌色や黄土色をしており、アジアンチックな造形、具体的にはインドの女神のような容貌をしているものもある



【写真1】 「女仮面」(エジャガム)

「写真1」。また、このあたりには、マミ・ワタと称する女神の祭祀も存在するが、こちらも「白人」の姿である。エジャガム人にもエクバと称する女性の結社があり、多産性や豊饒性を司るとされているが、この結社の力にも、やはり「白人」の女性がかかわっている「写真2」。

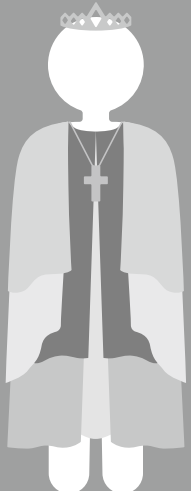
異質性、非人間性と白

ただし、アフリカにおいて、白いことは好ましいとばかりはいえない。

黒い聖母は誰のものか

——ヨーロッパ・キリスト教の裏表

新免 光比呂 しんめん みつひろ
民博 超域フィールド科学研究部



ヨーロッパには数百の黒い聖母像あるいは聖母子像が存在する。もちろん黒いといっても焦げ茶色であったり、くすんでいるだけであったりする場合も多い。だが、「黒いアテナ」などというギリシャのアテナ女神がアフリカ系の黒人であったかのような連想を導く刺激的なことばもある。ちなみに「黒いアテナ」というのは、歴史学者パナールが古代ギリシャ文化の成立に関してエジプトやフェニキアなど東方の影響を重視したモデルを主張し、あわせて近代ヨーロッパで人種主義とロマン主義が台頭し、進歩主義とむすびつくことでアリア人優位の世界観が古代ギリシャを専有化したと糾弾した議論である。

黒い聖女像

ところで、ヨーロッパの白人社会のなかに黒い聖像が見られる一例として、フランス南部サント・マリー・ド・ラ・メールの黒い聖女サラ(サラ・カリ)がある。教会の地下室にはロマ(ジプシー)の守護聖人とされた黒いサラ像が祀られ、毎年、多くの巡礼者を集めている。伝説では紀元四〇年ごろ、ユダヤ人の手によってイスラエルの地を追われたマグダラのマリ



利永琉球人傘踊 (2004年10月)

各地の琉球人踊
これらは呼称もさまざまであるが踊の内容もさまざまである。鹿児島県指宿市の利永琉球人傘踊では、紺の着物に色鮮やかな鉢巻ぎと帯を着け、唐傘、扇、太鼓や鉦をもった踊り手が「かれよし」などの歌に合わせて踊る。現在は小学生が踊っているが、かつては「ニセー」(若者)が踊り、男性は女物の着物を着るなどして派手に着飾り、踊り手が



川尻琉球人踊 (2000年4月)

衆目を集めたという。この踊は、江戸時代に鹿児島を訪れた琉球使節の様子を表現したものとされる。
同県霧島市の川尻琉球人踊では、冠に口髭に紺の琉装の「親方」、琉球鬘に紺の琉装で裾を絡げた「従者」、踊り手を女性たちが務め、三味線、鉦太鼓の囃子と歌に合わせて「やんばる」「大和人」などの曲目を踊る。踊り手は、かつては自分の髪を伸ばして琉球鬘を結った。着物も、このあたりの家はどこでも琉球紺をもっていたので、それを着て踊ったという。この踊は、川尻の近くに漂着した琉球の人びとから習った、あるいは琉球使節が浜に着いて島津公のもとに向かう途中で踊った踊を真似たものといわれている。
種子島の西之表市のヨンシー踊は「願成就」とよばれる秋祭りで踊られる「大踊」のひとつである。青年男子三、四〇人の踊り手に、赤ら顔の仮面を着けて琉球の大工や山師に扮した役が加わり、首里の王城の資材伐り出しの際に歌ったとされる「国頭サバクイ」風の歌詞が入った歌に合わせて踊る。かつて地元の人びとが船乗りとして「琉球旅」に出た際に、沖縄で覚えてきた踊といわれている。

「琉球人」を演じる人びと

笹原 亮二 民博 学術資源研究開発センター

鹿児島県の九州側と宮崎県南部、種子島には、沖縄の人びとに習ったり、沖縄の人びとの姿を真似たりしたとされる芸能が伝来する。それらは「琉球人踊」とよばれるほか、場所によっては「琉球人傘踊」「ヤンセ踊」「ヨンシー踊」「唐人踊」などともよばれる。各地の祭りや道路の開通などの祝い事の際に踊られ、その数は三〇力以上に上る。

ア、マリア・サロメ、マリア・ヤコベなど聖女たちと小船に乗って、奇跡的にカマルグ地方のサント・マリーにたどり着いたとされる。海の二聖女マリアとよばれるサロメ、ヤコベと付添いのサラがこの地に残り、他は旅立ったと伝承は語るが、サラはもとから住んでいたという伝承もあるらしい。毎年五月二四日前後、十月二二日前後に催される祭りには多くのロマが集まる。聖女サラの像が教会から海まで運ばれるのであるが、本来的には海の二聖女マリアの祭りであって、五月二四日と二五日はヤコベの祭り、十月二二日はサロメの祭りといわれる。しかし、どうみてもサラのほうがメインであって、二四日には、地下室のサラの像にローソクをささげ、病人の痛みをやわらげるというインドの習慣にしたがって、持参した外套や肩布をサラの像に着せる。午後には、礼拝堂の天井裏からサラの聖遺物箱がおろされ、参拝者たちは先を争って箱に触れようとする。そして、サラの像が海まで担ぎ出され、司教による祈りと聖水による清めがおこなわれると再び教会にもどされる。二五日には、カトリックの祭礼として二人の聖女マリアの像がサラと同じように海水のなかまで担ぎ込まれる。このサント・マリー・ド・ラ・メールへの巡礼は、ロマが移動する名目をたてるにはうってつけで、教会側もまた布教を目的として黒いサラを聖女として祀ることを認めたという。ただし、聖女サラはカトリック教会で列聖されているわけではない。



上：南フランスの青空のもとで聖女サラ像をかいて海へ向かう人びと
下：ふたりのマリア聖女像が教会から出てきたところである
(いずれも本館ビデオテープ「7179 黒い聖女サラ信仰の巡礼——南仏サント・マリー・ド・ラ・メール」より。撮影者・本館名誉教授 大森康宏)

黒い聖女サラはロマによる崇拜対象であるから、ヨーロッパ人(白人)には関係がないともいえる。だが、「黒い」表象をもつ聖母像、聖母子像はヨーロッパに数多く存在している。最初に述べたように、その「黒さ」は単にくすんでいられるだけなのかもしれないが、異人としての表象が含まれているともいえるだろう。そもそも聖母マリア崇拝が地中海の地母神崇拝と密接な関係にあることは、つとに知られている。黒い聖母像には古代ガリアの母神像が影響しているとの説もあるが、聖母マリアの表象のなかに他者性としての「黒色」が含まれていることは、キリスト教を「白色化(ヨーロッパ化)」しようとしたヨーロッパ人が抑圧しきれなかった要素がヨーロッパ・キリスト教に残っていることを示しているようにも思われる。

琉球人踊と歴史

これら三力所以外の踊も含めて、各地の踊はいずれも沖縄や沖縄の人びとのかかりを由来として伝えているものの、実際の沖縄の踊との類似はほとんど感じられない。また、奇矯で滑稽な動作の演技、仮面や衣装や化粧による異相・異形の扮装、踊り手が意味を解さない詞章が混じるかけ声や歌詞といった、沖縄の人びとが自分たちとはさまざまな面で異質であることを強調するかのような演出が施されていることも共通する。

それに加えて、こうした踊が熊本県と宮崎県中部以北、奄美大島以南の奄美群島では見られず、旧薩摩藩領に分布が限られることを併せて考えると、これらの踊の伝来が、薩摩藩が慶長一四（一六〇九）年の琉球侵攻によって琉球支配を確立し、琉球から鹿児島に進貢船や使節が頻繁にやって来るようになったという、この地域が経てきた歴史と無関係ではないことを予想させる。更に、奄美大島



ヨンシー踊（2003年10月）

以南の各地の芸能に、丸に十の字の島津氏の紋をつけたそれほど奇矯でも滑稽でもない武士や役人がしばしば登場することも視野に収めると、この地域の薩摩藩と琉球の支配・被支配の歴史のなかで、双方の人びとが相手側の人びとに対して抱いた必ずしも対等とはいえない認識が、それぞれの芸能に刻印されているようにも思えてくるが、うがち過ぎであろうか。

ジャガーを象った石彫や、金製首飾りの墓などが毎年のように出土し、今では考古学関係者ばかりでなく、一般にもその名は知られるようになった。わたしたちは遺跡見学会や出土遺物の展覧会などとおして、村人に調査・研究内容を説明し、また作業員の選出や給与についても村会議に託すなど、村との共同作業を心がけてきた。このことが功を奏してか、五年ほど前に遺跡保護団体が自主的に結成されている。



「パコパンパの貴婦人」を担ぐ高校生たち（2015年）

日本人考古学者に 仮装

関雄二 民博 人類文明誌研究部



南米ペルーの山岳地帯では、乾季にあたる六月から一〇月にかけて祭りが集中する。一六世紀半ばのスペインによる征服以降、強制されながらも浸透していったカトリックの守護聖人を戴く祭りが多い。とはいえ、酒や食べ物、音楽や踊りに興じる人びとの姿は、キリスト教とはいえないアンデスのなものを感じさせる。村内を巡回する聖人像の行列にも、風変わりな人びとが加わることが多い。頭に鳥の羽根飾りを、足首にはガラガラを巻き付け、手に鞭をもつて飛び跳ねる。どう見ても異邦人である。アンデス山脈の東側に広がるアマゾン地帯からの来訪者で、北高地ではチュンチヨスとよばれる。日本の村祭りでも外来の来訪者が人びとを言祝ぐといわれるが、それに似ている。

わたしたちの発掘調査

わたしたちが二三十年以上も発掘をおこなってきたペルー北部高地パコパンパ遺跡の麓に、調査期間中滞在する同名の村がある。村祭りではチュンチヨスこそ登場しないが、外来者が重要な役割を果たす。遺跡は紀元前一二〇〇年ごろから紀元前五〇〇年ごろにあたる大神殿で、東京ドームひとつ分くらいの大きさを誇る。二〇〇九年に、金製の耳飾りを副葬した女性指導者の墓を発見し、「パコパンパの貴婦人の墓」と名付けた。その後も



「関雄二先生」と書かれた褌をかける幼稚園児（2015年）

仮装行列に登場する「わたし」

そんな村人の意識は、村祭りにもあらわれ始めた。祭りを仕切る委員会の発案で、二年前から仮装行列が祭りの出し物に加わったのである。幼稚園児や小中学生が、さまざまな人物に仮装する。村の守護聖人である聖女サンタ・ロサやイエス・キリストが登場するのは普通だとしても、「文化遺産の村パコパンパ」と書かれたブラカードをもつ母親の後から、遺跡で発見された「パコパンパの貴婦人」姿をした女兒が登場したのには驚いた。それだけではない。パナマ帽をかぶり、手に杖をもった、かわいらしい男児の肩にかけられた褌には「YUJUI ZEKI (ユキセキ)」の文字が見えるではないか。綴りの間違いはともかく、調査中のわたしの姿にはちがいない。しかも調査に加わる日本の女性考古学者の仮装も続く。小中学生の行列はもっと豪華であった。採集狩猟民から始まり、「パコパンパの貴婦人」、インカ王、植民地時代を象徴するイエス・キリストや聖人、村にはじめて布教に来た宣教師、そして再び「わたし」が登場したのである。

わたしたちの存在や調査の成果は、人びとの歴史意識のなかに位置づけられ、アイデンティティのよりどころとなりつつあるようだ。文化遺産の保護や活用ばかり気をとられていたせいか、地元の人びとが自らの手で歴史や文化遺産への関心を高めていたことに自分でも気づいていなかった。仮装されるのも悪くないものだ。

コミケサークルにおける 参与観察

ばん りつ
阮 立
総合研究大学院大学博士課程



同人誌を「売って」みました
Kさんの教えに従って筆者が作ったラベンダーのプレゼント

アニメ、マンガ、ゲームなどの原作をもとにした同人誌とは、ファン同人による二次的な創作雑誌である。コミケで同人誌を売るとはどのようなことか。2016年の夏、サークルF（仮名）に同行してみた。

に着いたら、早速自分のサークルスペースを見つけ、スーツケースから同人誌や道具をとり出して、準備を始めた。その後、一般参加者へのプレゼントの用意を筆者に任せ、コスチュームの着替えのためにコスプレ更衣室に向かった。

十時になり、コミケ開会の放送に伴い、数万人の買い手が一気に会場に殺到した。会場の外にまで列をなしていた買い手のほとんどが大手サークルや人気作品サークルエリアに向かった。人気のある同人誌はすぐに売り切れるし、終了後の混雑を避けるために午後になったら早めに戻るサークルもあるため、買い物は午前中に集中するのだ。

Fは大手サークルではないし、とりわけ人気のある作品を扱ってもないが、Kさんのスペースにも、早速、一人の中年の女性がやって来た。Kさんは喜んで立ち上がった。客は、二カ月前、大阪の同人イベントで知り合った友達であり、新しい同人誌と同人バッグを買いに来たのだ。「あのラストシーンはすごかった」などと、ゲームの内容を話しながら、プレゼントや手紙、ポストカードが同人誌と一緒に渡された。ほかに、同じジャンルのサークル代表や一般参加者も何人か寄ってきた。買うかどうかにかかわらず、Kさんは「ぜひお手にとってみてください」と声をかけ、プレゼントを渡していた。

しばらくして、客足も途絶えたころ、今度はKさんが買い手として同人誌を買いに行った。留守を預かるあいだに、とおりがかりの一人の女性がポスターに惹かれ、「こんなサークルもあったのか」と驚いた様子をみせた。筆者は、無料のプレゼントやポストカードを渡し、「後で来てね」と伝えたが、終了時刻の午後四時になっても姿をあらわさなかった。



手前が400円で販売した同人誌の夏の新刊。Kさんは他に同人バック、キャラクターのフィギュアとコスチューム、はがき、手紙、ポスターを自費で作成した

★
日本、東京



出展当日、緑色のドレスでコスプレしたKさん

「販売」を介して、同じものに興味をもつ人たちをつなぎ、コミュニケーションの場を与える意義があるのだ。「売る」ことだけに目をくらませた中国からの一部の投資家が、儲からないまま失意に沈むのもやむをえないかもしれない。

海外において、日本のコミケ（コミックマーケット）は、アニメ・マンガファンの聖地であり、投資家からすれば商売のチャンスが芽生える場でもある。筆者の出身地である中国では、このコミケで販売される同人誌を自当てに日本に来るファンや、同人誌を中国で転売することで儲ける人びとがたくさんいる。さらに最近では、中国で制作された同人誌や中国人のコスチューム、レイヤーなどを日本に進出させ、コミケで儲けようとする人が増加している。しかし、そのほとんどが失敗に終わり、失望する人も多い。彼らにはビジネスとしては成功しがたいようにみえるが、そもそも、日本のファンたちはなぜコミケで同人誌を売るのであろうか。この素朴な疑問をもって、二〇一六年の夏、先輩の紹介で、Kさんのコミケサークル参加に同行した。

コミケのサークル参加とは、自費で作った同人誌や同人グッズなどを会場にもち込み、一般参加者に「売る」ために同人サークルとしてコミケに参加することを指す。Kさんは、通訳の仕事のあいだである朝四、五時や夜中、休日を利用して、半年くらいの時間をかけて、ファンである日本のゲームの同人誌や同人グッズを自費で作っている。そして彼女は、サークルFという名でコミケ「日目」にゲームのキャラクターのコスプレをしながら参加したのである。

サークルFの一日

当日の朝五時五十分、Kさんの家近くの駅前で合流し、コミケの会場であるお台場の東京ビッグサイトへ向かった。彼女は、電車のなかで急いでサークル向けのガイダンスとコミケのカタログを最終チェックした。会場

「売る」ではなく、花火を打ち上げる

KさんのサークルFでは、印刷費四四〇円ぐらいの同人誌を四〇〇円で売っている。サークル出展料、交通費、コスチュームとプレゼントの材料費、時間、体力など目に見えないコストはともかく、作った同人誌を完売しても印刷費さえカバーできないのはいうまでもない。にもかかわらず、彼女にとって同人誌を売るといふことは、どのような意味があるのだろうか。

同人誌を売るといふことは、「人生のいちばん大きな花火を打ち上げることだ」とKさんは語った。確かに、自分の汗とゲーム作品への愛情で綴られた同人誌を売るといふことは、途方もなく長い準備期間と比べれば、花火が上がるように一瞬でしかなかった。そこで得たのは、利益ではなく、その瞬間を共有し、ともにアニメやマンガを大切に思う人との縁である。

同人誌を売って実感したのは、コミケの商業化が進む一方で、サークルの多くが「売る」ことより、できる限り多くの人に手作りの同人誌を渡し、感動を共有することを重視しているようにみえることである。現代社会における売り手と買い手のあいだの無機質な関係とは対照的に、コミケには、



会場のあいだを歩き来る人びと

開館40周年記念特別展
「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」
シーボルトが終焉の地 ミュンヘンに残したコレクションをとおし、民族学博物館の父とも呼べるシーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえります。
会期 8月10日(木)～10月10日(火)
会場 特別展示館



花鳥図衝立 ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich (MFK)

開館40周年記念 カナダ建国150周年記念企画展
「カナダ先住民の文化の力」
過去、現在、未来
カナダは2017年に建国150周年を迎えました。同国と先住民との関係の変化に着目しながら、多様な先住民文化の歴史と現状、未来を紹介いたします。
会期 9月7日(木)～12月5日(火)
会場 本館企画展示場



ハイダの儀式、ボトラッチの様子(2006年8月撮影)

公開講演会
「メソアメリカとアンデスの古代文明と現在」
メソアメリカのテオティワカン文明とアンデスのナスカ文明を発掘調査する考古学者などが、最新の研究成果をもちより、古代アメリカ文明について議論します。
日時 7月1日(土) 14時～17時
(13時30分開場)
会場 本館第4セミナー室(定員50名)
※申込不要、参加無料、先着順

研究公演
「エチオピア高原の楽師アズマリの音楽とその世界的展開」
日時 8月7日(月) 13時30分～16時30分
(13時開場)
会場 本館第5セミナー室(定員80名)
出演 デレフ・デツサレイ
司会・解説 川瀬慈(本館准教授)
※要事前申込、参加無料(要展示観覧券)、先着順



夏休み子どもワークショップ
「イスラームの人びとの衣装を知ろう」
「ワールドワークに挑戦！」
自由研究はみんなばくで解決！みんなばくで1日研究者になって「ワールドワーク」を体験してみよう。
日時 7月22日(土) 10時30分～16時
(10時20分集合)
講師 菅瀬晶子(本館准教授)
ファシリテーター 冬木明里(本館技術補佐員)
会場 本館展示場
対象 小学4年生～6年生
※要事前申込(先着順/定員12名)、参加費500円

みんなくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション！点字体験ワークショップを開催します。
日時 7月8日(土) 12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

カレシジニアター
「地球探究紀行」
開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。
時間 13時～14時30分
会場 あべのハルクス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費1000円、定員各回50名
主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
7月12日(水)
セネガルのガラス絵とその変遷
歴史と生活を記憶する
講師 三島禎子(本館准教授)

7月26日(水)
エチオピアの世界的展開
講師 川瀬慈(本館准教授)
お申し込み・お問い合わせ先
ウエブ産経カレシジニアター係
06-66333-9087
※各イベントについてくわしくはみんなばくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなばくゼミナール

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第470回 7月15日(土)
ネパールの楽師カースト・ガンダルバの現在
講師 南真木人
(本館准教授)
弓奏楽器サランギを奏で、なりわいとしてきたガンダルバの人びと。ここ30年の間に、彼らの演奏活動や暮らしがいかに変化してきたのかを映像を交えてお話しし、ガンダルバの現在を考えます。



ガンダルバの次世代から生まれたラクシャ・バンド

みんなばくウィークエンド・サロン

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなばくの展示資料について分かりやすくお話しします」。
7月2日(日) 14時30分～15時15分 南アジア展示場
南アジアのクリケット文化
話者 三尾稔(本館准教授)
7月9日(日) 14時30分～15時
ヨーロッパ展示場→アフリカ展示場
アイコンからガラス絵へ
話者 三島禎子(本館准教授)
7月16日(日) 14時30分～15時 アメリカ展示場
チユルカナスのやまの
話者 齋藤晃(本館教授)
7月23日(日) 14時30分～15時15分 東南アジア展示場
ジャワ島のガムランのリズム
話者 福岡正太(本館准教授)
7月30日(日) 14時30分～15時15分 本館ナビひろば
タンデール—ワズベキスタンのパン焼き窯
話者 寺村裕史(本館助教)

刊行物紹介

■飯田卓 編
『文化遺産と生きる』
臨川書店 4,000円(税別)



文化遺産は誰のものなのか？文化遺産を抱えるコミュニティとその担い手たちの視点に立ち、世界各国で加熱する文化現象の実態を描き出す。姉妹編『文明史のなかの文化遺産』に比べ、文化遺産研究者向けであり、無形文化遺産保護条約(2003年)以後に表面化してきた文化遺産の問題を論じている。本館の機関研究の成果を書籍化。

■飯田卓 編
『文明史のなかの文化遺産』
臨川書店 4,000円(税別)



文化遺産は誰のものなのか？文化遺産を抱えるコミュニティとその担い手たちの視点に立ち、世界各国で加熱する文化現象の実態を描き出す。姉妹編『文化遺産と生きる』に比べ、文化人類学者向けであり、「文化とはそもそも何か」という疑問に答える章構成になっている。本館の機関研究の成果を書籍化。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第469回 8月5日(土) 13時30分～14時40分
「みんなばく」を語るシリーズ
民族学で解く千里ニュータウンと大阪万博
講師 中牧弘允(吹田市立博物館館長、本館名誉教授)
千里ニュータウンに暮らす住民は主に「一九六〇年代に「出オオサカ」を果たした都市民です。核家族が基本で「家」の観念は薄く、数百年の伝統を継承する村人とは異なる文化を形成してきました。このような千里丘陵における新旧の住民の文化的差異を比較し、一九七〇年の大阪万博がもつてきた意味をかんがえます。また、大阪万博の遺産である万博公園が千里丘陵において果たしている役割についても考察を加えたいと思います。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。
第470回 9月2日(土)
シーボルト父子が集めたアイヌ文化
講師 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室 主幹、本館名誉教授)

東京講演会

会場 モンベル御徒町店4Fサロン
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円
第119回 7月15日(土) 13時30分～14時40分
新館長就任記念！
文明の転換点における博物館
講師 吉田憲司(本館館長)
人類の文明は、いま、大きな転換点を迎えているように思われます。従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団のあいだに、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯が至る所起こるようになっていきました。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、相互の違いを超えてともに生きる世界を築くための知が求められています。このような時代における博物館の役割についてお話しします。
※講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます(40分)。

想像界の生物相

人面有翼の天馬ブラク

早稲田大学講師 小林 一枝 こばやし かずえ



資料名 | ガラス絵 (天馬ブラク)

標本番号 | H0222913

地域 | セネガル

制作年代 | 1930年代

サイズ | 縦 26 × 横 33

※サイズの単位はセンチメートルです



資料名 | ガラス絵 (天馬ブラク)

標本番号 | H0222896

地域 | セネガル

制作年代 | 2000年

サイズ | 縦 37 × 横 53

※サイズの単位はセンチメートルです

◆◆ 預言者に乗せて天界へ ◆◆

偶像崇拜を厳格に禁ずるイスラーム世界には、聖画がない。しかしながら、預言者ムハンマドの肖像をはじめ、宗教関連主題の絵画は少なからず存在する。とりわけ「預言者の昇天（イスラー／ミウラージユ）」は好個のモチーフだった。

伝説によれば、ある晩、預言者は彼のもとにあらわれた大天使ジブリール（ガブリエル）に連れられてメッカからエルサレムに行き、そこから七層の天界をめぐる最上界で神アッラーに見えた後、七層の地獄をめぐる、一夜のうちに帰宅したという。このムハンマドの夜の旅に関しては、聖典『クルアーン』一七章冒頭の一節に短く述べられているにすぎない。後世により詳しい逸話となって伝えられ、モンゴル時代（イル・ハーン朝）以降は独立した『昇天の書』として挿絵付きの写本が多数制作された。

このとき、ムハンマドはアラビア語で「稲妻」を意味するブラクという天馬に乗って、エルサレムの岩のドームから天界へと飛翔したとされる。

ここに見られる二点のガラス絵に描かれているのは、人面有翼の天馬ブラクである。周知のとおりイスラームという宗教は、唯一神アッラーの崇拜のみを厳格に求めており、聖人や聖獣の崇拜を原則として認め

ない。したがって、預言者とその背に乗せて天界を旅した天馬であっても、ブラク自体が崇拜されることはないが、預言者を描くことに禁忌の念をいだく画家たちは、預言者をベールに覆われた姿や火焰状の光のみであらわしたり、ブラク単独で「預言者の昇天」を象徴したりすることもあった。

◆◆ 多様に描かれたブラク ◆◆

前述したように、『クルアーン』はムハンマドの夜の旅の詳細を示してくれない。より多くの情報を与えてくれるのは、預言者にまつわる伝承を集めた『ハディース』であるが、ブラクの姿形については、たった一行「それから騾馬よりは小さく驢馬よりは大きい白い動物が連れてこられたが、これこそ空を駆けるブラクであった」としてしている。（牧野信也訳）

つまり、雌雄の区別もここでは不明なのである。実際、ブラク画像の形成には、イスラーム以前の古代オリエントやエジプトの美術にあらわされた人語を解する合成獣の姿が反映されており、女性の上半身と馬もしくは驢馬の半身が合わさったケンタウロス型で描かれることが多かった。現存最古の挿絵（一四世紀）に見られるように、通常、人面獣ブラクの頭部には冠、前脚の付け根には二枚の翼が描かれた。イス

ラーム神秘主義において、預言者の昇天主題が好んでとり上げられるようになること、しだいにブラクの姿も、尾は孔雀、冠の頂部には羽根飾り、首や脚部にも装身具が付けられるようになっていった。

セネガルのガラス絵は、通俗的な土産物や西洋人蒐集家のための作品が主流となる以前、スナ派のムスリム芸術家（多くは神秘主義者）が、すでに東のイスラーム世界に流布していた宗教的な主題をガラス絵として描き始めたことが嚆矢であるという。それゆえ、昇天図も好んで制作された。これらセネガルのブラク画像は、二〇世紀に描かれたものであるが、イランやインド、またエジプト、シリアで流布していた版画やポスターの構図を手本とした痕跡がある。特にインドでは、ムガル時代以降ブラクの画像は単独で、豊かな女性の上半身とインドの国鳥でもある孔雀のキメラ（合成獣）として独特な形態で描かれた。右ページ下の一枚には、肩から広がった翼の背後に、イスラーム世界で魔除けとして用いられた「眼」が多数付いているが、孔雀の羽根の模様はよく見ると目の形をしているので、そこから発想を得たのかもしれない。透明なガラスの裏側に通常の絵画とは逆の着色手順で描かれた天馬は、ガラスを透過した光を受けて、その神秘的な輝きもいや増している。

一九九〇年二月から一九九六年六月の噴火終息宣言まで続いた雲仙岳の平成大噴火。この噴火災害の教訓を今に伝える、日本で唯一の火山体験ミュージアムを紹介する。

雲仙岳災害記念館とは

雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）は、一九九〇年一月から一九九六年六月まで続いた雲仙岳の噴火災害の教訓を伝える博物館である。二〇〇二年七月に開館したこの博物館は、日本で唯一の火山体験ミュージアムとして、多くの来館者を迎えている。雲仙岳災害記念館の愛称は、がまだすドームという。「がまだす」とは、島原地方の方言で「がんばる」という意味であり、雲仙岳災害記念館の役割を的確にあらわした愛称といえる。

雲仙岳の平成大噴火

平成大噴火とされた、雲仙岳の噴火災害を簡単に振り返りたい。雲仙岳は、一九九〇年一月一七日に一九八八年ぶりに噴火した。一九九一年五月には巨大な溶岩ドームが確認され、そして六月に大火砕流を発生させた。このとき、消防団員や火山学者、報道関係者ら四三人が死者・行方不明者となるなど痛ましい被害をだした。そして、この噴火活動は一九九六年



雲仙岳災害記念館の全景（掲載写真はすべて2017年3月に撮影）

六月まで続き、山頂付近に溶岩ドームである平成新山を出現させた。

雲仙岳災害記念館は、平成大噴火による自然の脅威と、災害から得た教訓を風化させることなく、正確に後世に伝えることを目的とした博物館である。その開館時期は、一九九五年一月一七日に発生した阪神・淡路大震災の記憶を伝えるた

景」の展示と、雲仙岳の噴出物の標本である「平成噴火噴出物のはぎ取り標本」の展示にいたる。ここまでの展示で、雲仙岳の平成の大噴火の概要とその脅威が理解できる仕掛けとなっている。

次に、現在の雲仙岳の様子を鳥の目線で見ることができ、「フェニックス・アイ」、「島原大変肥後迷惑」といわれた寛政四年（一七九二年）の大噴火の歴史を知ることができる。「島原大変劇場」へとつながる。続いて、二階に移動すると、一九九一年六月三日の大火砕流で犠牲になったカメラマンの被災カメラと、カメラに残されていた実写映像（撮影時間三七八秒）を基に編集されたドキュメンタリー番組「雲仙・大火砕流378秒の遺

言」を見ることが出来る。最後に、被災した方々から来館者へのメッセージを伝える「明日へのメッセージ」から、被災者の気持ちを知ることが出来る。これらの展示からは、火山噴火時の避難の重要性、防災の意識の重要性を知ることができる。

そのほか、雲仙岳災害記念館の関連施設として、車で五分程度はなれたところに、土石流被災家屋保存公園がある。ここでは、雲仙岳の平成大噴火による土石流に飲み込まれた家屋がそのまま保存・展示されており、当時の被害の大きさを直接感じることが出来る。

災害の記憶を伝える展示の役割

災害の展示は、大きく三つの段階に整理することができると考える。ひとつめは、災害発生から比較的早い時期におこなわれるもので、被災地の社会背景を見つめなおし、その地域で育まれた文化に配慮した復興計画の必要性を提示する展示である。ふたつめは、被災地から学びを得て、他の地域において将来の防災・減災を考える展示である。そして、三つめは、これまでのふたつの段階の展示を継承しながら、災害の経験や記憶を後世に伝えるためのメモリアルとしての役割を期待される展示である。これは、大災

めに二〇〇二年三月に開館した「防災未来館（現在、人と防災未来センター）」とほぼ同時期である。したがって、日本における大規模災害の展示施設として、草分け的な存在と位置づけることができる。

雲仙岳災害記念館の展示内容

雲仙岳災害記念館の展示は、一階と二階にわたって九つのコーナーに大別されている。まずはマグマに包まれるような印象をもつ導入部分の「マグマゲート」を抜けると、火砕流で焼け焦げた木々を展示した長さ三九メートルの「火砕流の道」とよばれる展示がある。ここでは、床を火砕流と同じ時速一〇〇キロメートルで光が駆け抜けることで、その速度を体験できる。その後、実際の火砕流や土石流の映像を基にして制作された雲仙岳



「焼き尽くされた風景」の展示コーナー

の噴火を体験できる「平成大噴火シアター」を観覧して、噴火で被災した電柱や電話、車両などが展示される「焼き尽くされた風景」の展示コーナー

害の経験を学び、次の災害への備えとすることを目的とした展示であり、被災地における災害の記憶の集積地として、被災地につくられるものである。まさに、雲仙岳災害記念館はこの役割を担った展示施設といえる。

雲仙岳災害記念館は、過去の災害によって引き起こされた被害の原因を分析しつつ、災害の記憶そのものを伝えていく役割を担っており、その目的に十分到達できる展示内容になっている。一方で、時間の経過にもなると来館者の記憶が薄れると、展示内容の理解を促すことは難しくなると考える。これを防ぐために災害の記憶の再検証と展示の更新は定期的におこなわなければならないだろう。このような点も考慮されたのだろうか、雲仙岳災害記念館は二〇一七年度にリニューアル工事に着手する。平成大噴火が発生した一九九〇年から二七年、噴火が終息した一九九六年からは二年、二〇〇二年の開館からは一五年を経た雲仙岳災害記念館。この時間経過のなかで、あらたに得られた知見や教訓がリニューアルに反映されることだろう。そのうえで、災害当時の生の記憶をどのように伝えるのかという点にも注目したい。リニューアル後の雲仙岳災害記念館に再び訪れてみたいと思う。

針仕事を引き継ぐ

笠井 みぎわ 総合研究大学院大学博士課程



修道院内の礼拝堂。祭壇覆い布がかけられた祭壇 (2017年3月)

こつこつと進めた針仕事をたとえ自分で最後まで成し遂げられなくても、何十年後に引き継ぐ「家族」がいる。引き継がれることで時間も場所も越えた、人と人の繋がりが生まれる。そんな針仕事のあり方をイタリアの修道院で見つけた。

修道院での労働

イタリアの巡礼地、アッシジ近郊の町、バステリアにあるベネディクト会の修道院では、国籍も年齢も異なるシスターたちが共同生活を営んでいる。彼女たちは、真っ黒な修道服に頭の前からつま先まで身を包み、祈りと感謝、奉仕と労働のなかで戒律にそった一日を過ごし、マードレとよばれる、修道院の最高責任者である院長から各々に見合った労働を与えられている。

修道院でのシスターたちの生活は、基本的に自給自足である。修道院内ではレタスやアーティチョーク、リンゴなどの作物が栽培されている。その収穫物を冬に備えて大量に貯蔵するため、冬が始まるまでに大人数でジャムやピクルスに加工し瓶詰めにする。シ

スターたちの労働には短期間で終わらせなければならぬ保存食調理の他に、刺繍やレース編み、編み物などを制作する針仕事がある。この作業のなかには、保存食調理と異なり、修道院内で緊急に必要なものとそうでないものがある。

前任者の針仕事

シスターたちの一日の労働は時間で区切られている。そのため一日の労働のなかで針仕事に従事するのは、個人の自由時間や、マードレに修道院内で緊急に必要なものを制作するよう依頼を受けたときに限られる。修道院内で制作される針仕事には、シスターたちが着用する作業着や祭壇覆い布のふち飾り用のレース編み、教会暦にそってデザイン

や色を変える教会刺繍などがある。教会刺繍とは、キリストの教えを文字の代わりに視覚化し、祭服や祭壇覆い布などに施される刺繍のことである。

しかし制作しているシスターの死亡や他地域への赴任によって作業が中断されることがある。個々の修道院に存在する共同体の戒律にしがい、やり残した仕事は基本的にはその修道院に残されるからである。近年、針仕事の技法を知るシスターが減少しているため、次に針仕事に長けた人が赴任するまで一〇年、二〇年という長期間その仕事は放置されてしまう。

わたしが話を聞いたドイツ人のシスターは、バステリアに赴任して一年になる。彼女が今



ドイツ人シスターが制作した祭壇覆い布のボビンレース (2017年2月)

とりに組んでいるのは、何十年も前に亡くなったイタリア人のシスターがやり残した、祭壇覆い布をふちどるボビンレースである。見知らぬ人が以前とりに組んでいた作業を受け継ぐことは、その人の手のくせを観察することでもあるので、その人となりを想像する手段にもなりうるのとことだ。現在、修道院内は国際化が進んでおり、シスターたちは自らの出身国にかかわらず、その土地や国の言語を習得する必要がある。イタリアの場合、使用される言語は礼拝も日常の会話もすべてイタリア語である。あらたな土地で、新しい言語と風習に慣れるまでが大変であるとドイツ人のシスターは話していた。



修道院の庭。案内してくれたフィリピン人のシスター (2017年3月)

時間を越えてつながる家族
修道院に入るとき、シスターたちは左手の薬指に指輪をし、主イエス・キリストの花嫁になり家族の一員として迎え入れられる。そんななかで、新しい赴任先で最初に自分の仕事として与えられた針仕事の労働は、それが前任者からの引き継ぎの場合、以前その共同体にいた自分が会ったことのない「家族」を知る手段にもなる。

イタリアにおける女性の針仕事は、人目にふれることなく、密やかに修道院や家庭という閉ざされた場所で発展してきた。針仕事に使う針と糸はどこにでももち運ぶことができ、他人の目を気にせずその作業に従事することができる。修道院では家族がそうであるように居室、家具、食器などともに針仕事もはるかむかしの故人を含む前任者から引き継ぐ場合がある。修道院という外部の人には見えない空間のなかで、前任者の針仕事を受け継ぐことは、自分が経験していない生、祈り、労働など、他の人の秘められた時間を引き継ぐことでもある。故に針仕事は、国籍を越えた「家族」としてシスターたちを繋ぎ、彼女らを悠久の時間に結びつける働きもかねている。誰かがおこなっていた針仕事を観察し触れることで、自身の身体と精神を各修道院の戒律に合わせて適応させていく働きがあるのではないだろうか。

へボい虫? クロスズメバチ



What's in a name?

 さかもと のぼる
坂本 昇

伊丹市昆虫館副館長

昆虫学出身でないわたしは昆虫館で働き始めて関心をもったのは昆虫の文化だった。なかでも「昆虫食」はゲテモノとして興味をもち始めたものの、食べると美味しく、採集や調理も興味深くてすっかりハマリ、研究者の方々の協力を得て企画展も二度開催した。

世界各国の昆虫食を口にする機会を得たが、なかでも大好きなのは日本の「ハチの子」である。おもにクロスズメバチやシダクロスズメバチの幼虫、蛹を指し、地元岐阜県や長野県では佃煮や炊き込みご飯などにして食べる。佃煮が土産物として売られているので、他地域の人でも食べたことがある人は多いだろう。しかし生きたハチの子を巣からとり出し、その場で調理して食べた味は格別で、じつに美味しい。地元では採集や飼育を楽しむ愛好会がいくつもあり、秋には自慢の巣をもち寄って重さを競うコンテストがおこなわれる。そのひとつである岐阜県恵那市串原のコンテストにわたしも毎年通い、見物とともに即売される巣を入手し、秋の味を楽しんでいる。

「ハチの子」のハチは地域によって「ジバチ」「スガレ」などの呼び名があるが、この地域では「へボ」という。愛好家たちは夏につくり始めた巣を採集し、その巣の飼育を楽しむ。彼らに話を聞くと、「へボは可愛い」、「刺されたら痛いけど怖くない」という。へボの飼育に心血を注ぎ、「へボの神様」とよばれた故三宅尚巳さんを訪ねてお話を伺ったとき、三宅さんは「へボはワシのこれだわ」と言って小指を立ててくれた。愛好家の人びとにとってへボは単なる獲物ではなく、愛らしい存在なのである。

しかしこのハチはどうして「へボ」というのだろうか？ 江戸時代の書物に「へぼ蜂」として紹介され、「へぼ」には「閉防」の字をあてていたことは知っていたが、名のいわれは聞いたことがなかった。もしかしたら、へボを愛する愛好家たちなら何か知っているかもしれない。そこで、串原へ愛好会がおこなう「へボ追い」を見せてもらったときのこと、小休止の時間に疑問をぶつけてみた。すると「知らんわー、お前知つとる?」「いやー、何やるなあ、あまり考えたことなかったなあ」と、その生息を知り尽くした強者たちも知らなかった様子。そのうち、「へボなんて変な呼び方やなあ、へボみたいやもんなあ」、「そうそう、へボいからへボっていうのかもなあ」、「それはそうかもしれんなあ」と言ってみなで笑った。「へボい」とはもちろん、下手くそな人、だめな人をあらわす俗語のことである。「そんなにへボいんですか?」と聞いてみると、へボはハチなのに気が小さくて怖がりだという。土中につくられた巣をとる際には、巣の周りの地面を棒などで叩く、すると親ハチは怖がって巣のなかに逃げてしまい、出入り口から出てこなくなってしまうそう。オオスズメバチなども土中に巣をつくるが、こちらは土を叩いて刺激しようものなら働きバチたちが怒って沢山出てくるという。やはり、へボいという理由も生息を知り尽くした猛者ならではの答えである。

それでもやっぱり、みんなはへボが大好きなようだ。子どもも出来が悪いくらいが可愛いというが、毒針をもつハチなのに小心者というあたりが可愛いということなのかもしれない。

編集後記

今までの人生で唯一の仮装は戦国武将の平手政秀である。小学生のときのことだ。地元の町の信長大名行列に駆り出され、気がついたら白塗り、着物で町内を練り歩いていた。同じ苗字の丹羽長秀ならともかく、若殿のご乱心^{いざ}を諷めて切腹した老臣になるとは。今もむかしも行事が嫌いな小生が、そもそもなぜ引き受けたのか記憶にない。ところでおよそ28年ぶりに再会した小学校時代の同級生によると、名古屋市レベルの大名行列に出るのはそれなりに光栄なことらしい。仮装を厭わず、あのあと精進していたら違う人生が開かれていたのだろうか。ともあれ、本号では仮装というもののありかたについて、特に異民族表象としての側面をもつものを中心にとり上げてみた。日本各地の「土人踊り」とそれに類する風俗については、かつてそれなりに盛んにおこなわれていたと思われるものの、その記録となるとなかなか見つかりにくい。読者諸賢からのご教示を乞いたい。(丹羽典生)

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

次号の予告

特集

開館 40 周年記念特別展

「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」関連

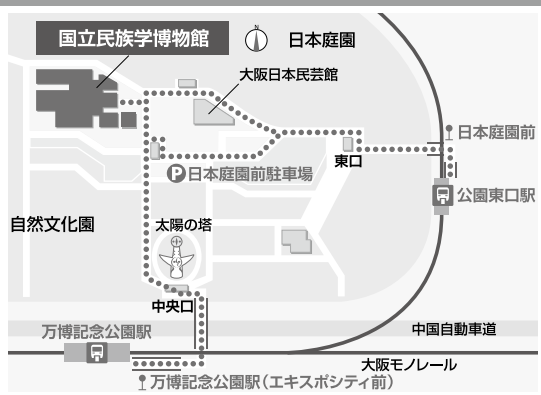
月刊みんぱく 2017 年 7 月号

第 41 巻第 7 号通巻第 478 号 2017 年 7 月 1 日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子
編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
南真木人 山中由里子 吉岡乾
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

8月に開幕！ 開館40周年記念・シーボルト没後150年記念

特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」



特別展図録
『よみがえれ！
シーボルトの日本博物館』
国立歴史民俗博物館監修
青幻舎発行
全264ページ、A4変形判
2,300円（税込）

千葉、東京、長崎と巡回し、6月に名古屋でも好評を博した特別展「よみがえれ！ シーボルトの日本博物館」が、8月10日（木）、ついにみんなぱくへやって来ます。江戸時代の日本は、シーボルトの目にどのように映っていたのでしょうか。医師であり博物学者でもあったシーボルトが収集した日本文化にかかわる資料をとおして紹介します。

当館の開館40周年記念特別展となる当展示は、10月10日（火）までの2カ月間の開催です。このヨーロッパからの里帰り展では、今まで紹介されなかった貴重な資料も初めて出展されるほか、美しい漆工品や日本画といった展示も圧巻です。次号の『月刊みんなぱく』で当特別展をテーマとした特集を掲載します。

また、ミュージアム・ショップでは関連のグッズや書籍を随時入荷予定です。みなさんのご来場をお待ちしています。



マグネット
[全8種類]
各520円（税込）



マルチクロス
1,000円（税込）



トートバッグ
800円（税込）



クリアファイル
[全3種類]
各400円（税込）

グッズに関するお問い合わせ

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
e-mail: contact@senri-f.or.jp 水曜日定休

※当特別展・企画展関連の商品は店頭での販売となります。

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念

企画展「カナダ先住民の文化の力——過去、現在、未来」

9月7日（木）から12月5日（火）まで、カナダの多様な先住民文化を紹介する企画展「カナダ先住民の文化の力」も開催します。カナダから輸入した関連商品なども入荷予定です。



トーテムポール
[左] 高さ6cm
1,200円（税別）
[右] 高さ7cm
1,400円（税別）



ドリームキャッチャー
[左] 直径3.8cm
1,450円（税別）
[右] 直径23cm
8,360円（税別）



ボールペン
500円（税別）